

伝記 良寛さん―前編 子供・生活・文芸

江戸時代の僧で良寛さんを知らない人はいないでしょう。子供好きで和歌の上手な人、越後（新潟県）の人です。

○「かすみ立つ　ながき春日に　子どもらと　手毬つきつつ　今日もくらし
つ」
はるひ　てまり

○「この宮の　もりの木下に　こどもらと　あそぶ春日は　暮れずともよし」

子供を愛し、子供らと遊ぶ良寛さんが歌った和歌で、ご存じの方は多いと思います。

良寛さんはただ単に子供を愛したお坊さんだけでなく大変な名僧で、最高レベルの文芸家（漢詩、和歌、俳句等）であるとの評価が今日一般です。書は重要文化財です。

子供をいつくしむ良寛さんを続けましょう。

かくれんぼの話です。

朝　田んぼに來た農民がわらの中に隠れている良寛さんを見て「良寛さん何をしているのですか」と、良寛さんは「静かに」そんな大声を出せば、子供たちに見つかってしまう」と。前日かくれんぼして遊んでいた子供たちが夕暮れに家に帰ってしまっても良寛さんは一人翌朝まで隠れていました。

これを愚と見るか一生懸命子供と遊ぶ良寛さんのやさしさと見るか、ここまです子供と夢中になって遊ぶ人は聞いたことがないでしょう。

良寛さんはこのほかおはじきも大好きです。豆をかけてやります。最後にみんなで豆を食べておしまいです。

良寛さんの後半生は故郷の越後（新潟県）で暮らしました。

四〇歳位から二〇年間ぐらい国上山くがみやまの中腹の五合庵という八畳一間の小屋で暮らしていました。六〇歳過ぎてからは一〇年間は麓の乙子神社の庵に住まい、更に没年の数年前からは友人の家の裏庭の小屋で暮らしました。

時代で言いますと越後での僧の生活は西暦で1797～1831年で江戸時代の後期になります。

この頃に越後で僧として、又漢詩、和歌、俳句等の文芸で活動した人です。

国上山（新潟県現燕市）は標高300メートル位でそう高くなく。頂上には真言宗の国上寺こくじょうじがあります。五合庵は国上寺の庵で空いていたので住むことができました。

山の中腹にあり里まで一時間はかからなかったでしょう。

一人住まいです。

食料は村々を托鉢で乞食して得ます。友人、知人、良寛ファンで村々の有力者（庄屋、商人等）が生活物資の支援をします。

良寛さんは一人前の食料しか持ちません。弟子もいません。法事などの仏事はやりません。檀家もいません。収入は托鉢と支援者の生活物資の支援だけです。

漢詩、和歌に秀でており、能筆でもありましたが作品には金銭は受けとりませんでした。金銭のために作りません。

それでは良寛さんが自分の庵を歌った和歌、漢詩の代表作をあげましょう。

和歌です。

○「のみしらみ 音になく鳴 秋の虫ならば わがふところは 武蔵の原」

○「飯乞いひこふと 里にもいはず なりにけり 昨日も今日も 雪のふれれば」

○「古悲之久者 太川奴こひしくばてき末勢 和閑や東者 志能たがやどはや末毛登 多東里こしのやまもとく耳たどり」
（後掲をご覧ください）

○「わが宿を 訪ねて来ませ あしひきの 山の紅葉を て折りがてらに
（後掲をご覧ください）

良寛さんの和歌は万葉調です。

中世の貴族の歌論、因習的な和歌を嫌いました。

良寛さんは新古今のような技巧を凝らした和歌を認めません。自然の心

から湧き出る歌を読みます。

鎌倉時代から江戸時代まで和歌の主流は新古今派です。

よって江戸時代は良寛さんの和歌は京、江戸では人気が出ませんでした。しかし大正時代時代になり、相馬御風や斎藤茂吉から高い評価を受け、今日では第一級の歌人と言われています。

漢詩です。

「芳草連天春将暮

桃花乱点水悠悠

我亦從來忘機者

光風惱乱殊未休」

抄訳（阿部龍一）

春の夕暮れ 若草が野辺一杯に連なり

川は乱れさく桃の花がゆるやかに流れゆく

自分はこれまで世俗の機縁を忘れた出家の身

しかしその風光の美しさに感嘆する心はいまだ休むことを知らない

この漢詩は夏目漱石が高く評価している詩です。

良寛さんの漢詩は平仄ひょうそくや韻いんにこだわりません。自由に作ります。

注 平仄とは漢字の音にはアクセントなしの平ひょうとアクセントがある仄そくの二分類にされます。漢詩ではこの平の音と仄の音が入る箇所が決まっています。は唐時代に整えられましたが、その後江戸時代まで日本では区別して発音出来なくなりました。それで辞書を片手に作詩したのです。

韻は同じ音を行（句）の最後の文字に入れます。偶数行目の最後の文字の音を同じにします。八行の律詩は第一行も合わせます

良寛さんは平仄や韻にかまわず自由に作詩します。

江戸や京での漢詩の名門主流派では認めません。

書です。

和歌の自画像歌賛と飴やの看板の例を後掲します。

斎藤茂吉や夏目漱石は良寛の書は技巧が無く拙である。大巧は拙なる如く

であると。

今日良寛さんの書は古代から今日までにかけて第一級品であると評価されています。国の重要文化財に指定されています。

弘法大師に並ぶと言う人もいます。

当時はお家流と言われる流儀が主流で良寛さんの書は越後以外では人気がありませんでした。

良寛さんは漢詩、和歌、俳句に大変秀でていると当時の越後の知識人から高い評価がなされていましたが、文芸の中心の江戸、京、大坂では一部の人の間でしか知られていませんでした。全国区ではなかったのです。

良寛さんの文芸は超一流との評価を与え、全国でその名を知らしめたのは大正時代に入って良寛さんの研究をした相馬御風そうまぎよふうと言う詩人です。新潟県

(越後)の糸魚川いといがわの出身の人です。

詩人、歌人、童話作家です。童謡「春よ来い」や早稲田大学校歌「都の西北」の作詞家で有名です。

相馬御風は、生存中の良寛さんを信奉していた解良栄重けらよししげが著わした「良寛禅師奇話」を元に伝記「大愚良寛」を著し、大正時代に良寛を多くの人に知らしめた人です。

戦後では水上勉の「良寛」が有名です。

良寛さんは詩人の詩、書家の書、歌人の歌を嫌いました。いわゆる作って売る商品化されたプロの作品を嫌いました。

江戸時代には江戸、京、大坂の文人の一部を除いてほとんどは良寛さんの文芸の才能を見ぬけませんでした。

多くの日本人がその文芸作品の秀逸を知ったのは大正時代からです。

絵本では優しい良寛さんと子供との遊びが強調されていますがその文芸作品は秀逸なのです。

そして名僧であることも忘れてはなりません。僧良寛さんについては別稿とします。

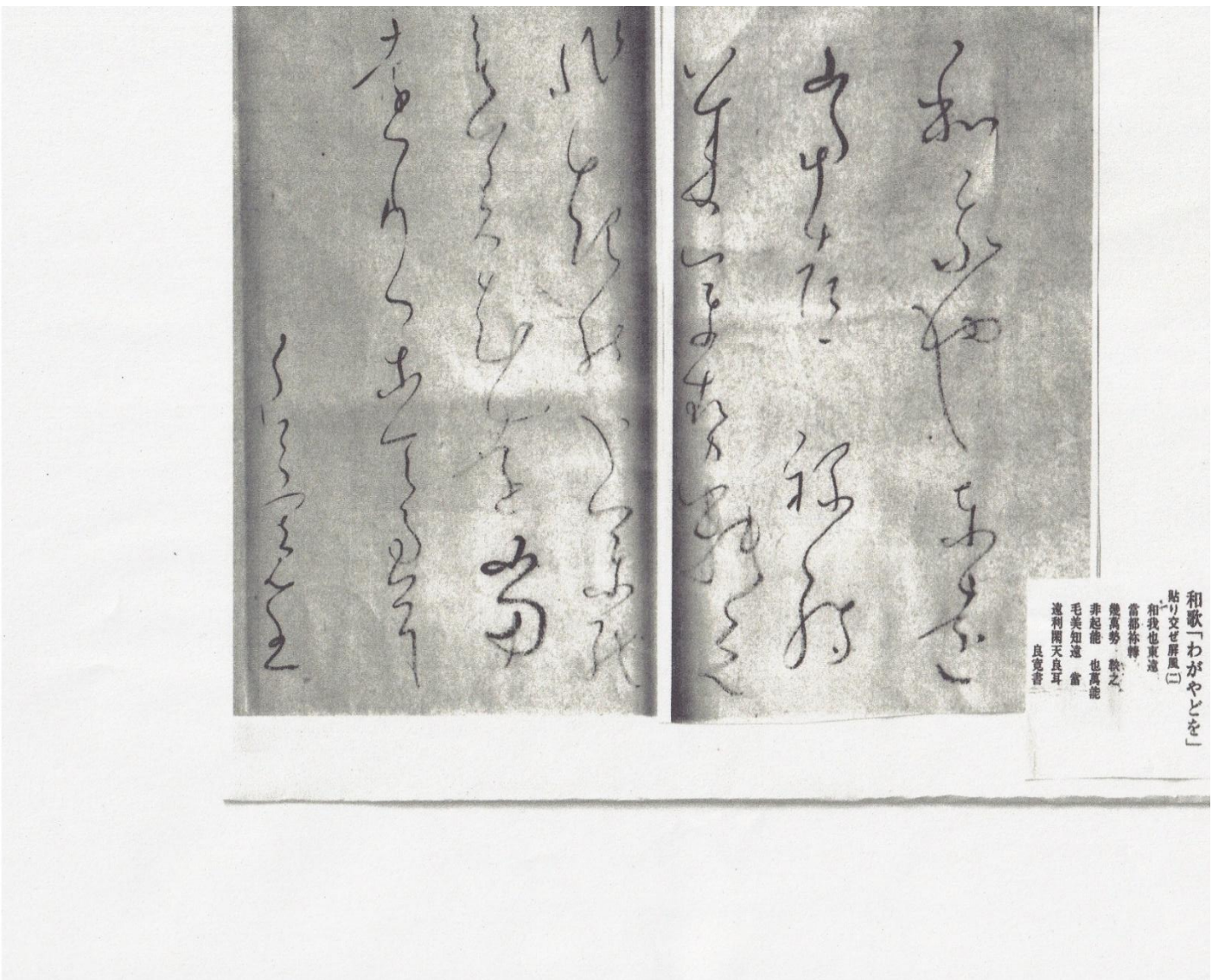
以上

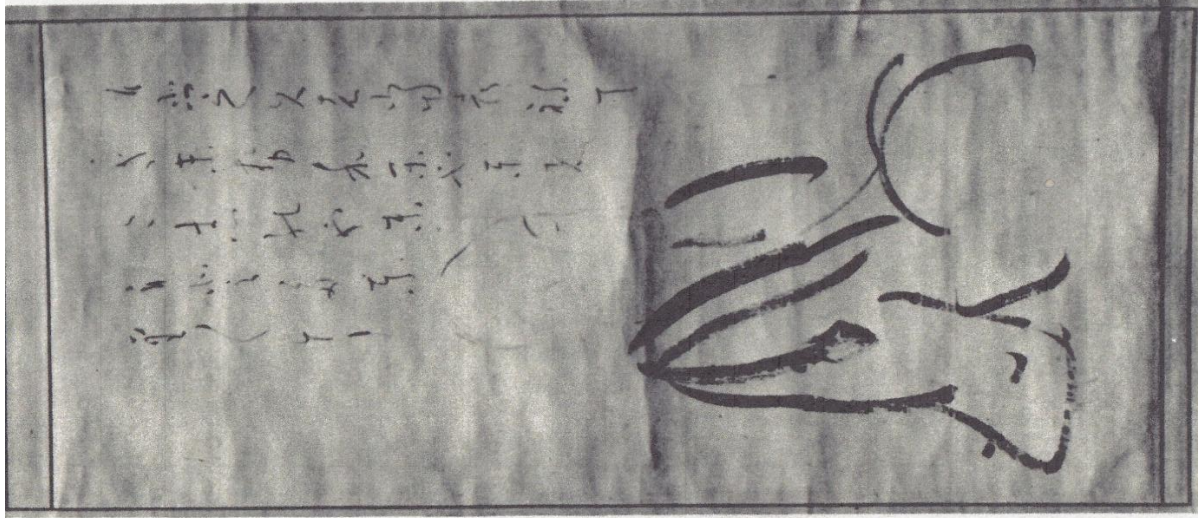
二〇二五年十月十五日

梅 一声

わが宿を 訪ねて来ませ あしひきの 山の紅葉を
手折りがてらに

良寛書





こひいしくば 木川 奴てきませ しがやうは
友悲え久菴 木川 奴てきませ 和閑や東菴

こしめやまふと まじりく
こしめやまふと 多東屋 耳

免御 御 水 あめ所
館屋乃蔵

